愛媛大学大学院法文学研究科人文科学専攻における教育の実質化を図るためのカリキュラム改革と「形成的アセスメント」

加藤　好文，吉田　正広，角田　妙香

（愛媛大学　法文学部　人文学科）

Curriculum Reform and 'Formative Assessment' to Improve Quality of Education in the Humanities Course, the Graduate School of Law and Letters, Ehime University

Yoshifumi KATO, Masahiro YOSHIDA, Taeka SUMIDA

(Department of Humanities, Faculty of Law and Letters, Ehime University)

１．はじめに

愛媛大学大学院法文学研究科人文科学専攻は定員10名の小規模な修士課程であるが，学問的には「人間文化研究」と「言語文化研究」という２つの教育研究領域のもと，人文科学系の多様な領域をカバーしている。その教育理念には，人文諸科学の理論及び応用を研究し教授することを通して，人文諸科学に関する高度で専門的な知識と能力を有し，かつ広範な学際的視野を合わせ持ち，適切な問題解決能力を備えた，「高度専門職業人」及び「高度で知的な素養のある人材」の育成を謳っている。しかしながら，現実には各専門分野の狭い教育研究に偏り，専門を横断するような教育やキャリア支援教育などを通じた視野の広い人材育成の面では，専攻の特徴である「多様性」をまだ十分に活かしきれていないように思われる。

そこで，平成22年度・23年度の愛媛大学教育改革促進事業（愛大GP）に「教育の実質化を図るためのカリキュラム構築と形成的アセスメントの導入」が採択されたのを契機に，２年間に亘って修士課程教育のさらなる改善に向けた取組を行ってきたので，ここに事例報告することとした。

２．取組その１

今回の改革では，学生が主体となって自ら設定した研究課題を究明し，修士論文の作成に向けて指導教員と対話を繰り返しつつ体系的に学び研究していくため，コースワークとリサーチワークの充実を図ることが主眼であった。

まず取り組んだのがカリキュラムの体系化で，従来のオムニバス方式の「総合講義科目」（選択科目）を廃止し，新たに１年次の必修として「コア科目」区分を設け，その下に「人文研究基礎論」および「人文研究実践論」の２授業科目を新設することであった。従来の「総合講義」は，個々の授業は興味深いものでも，ややもすると内容の統一性に欠けるきらいがあった。そこで，１年前学期に開講することとした「人文研究基礎論」は，人文学の教育課程を卒業した学生だけでなく多様な学修履歴を有する入学者が円滑に研究に取り組むことができるように，学士課程における学修を回顧・省察しながら，人文諸科学の研究の基礎を学び客観的視座から展望する機会を提供するもので，そのために，グループワークや複数の担当教員の講義及び外部講師の指導などを取り入れ，プレゼンテーション力の育成にも力を注ぐ内容とした（表１）。また１年後学期の「人文研究実践論」は，人文学科の教員を中心に組織されたさまざまな研究プロジェクトにおける研究報告を通じて人文諸科学の研究のプロセスや成果を実践的に学ぶとともに，学生が主体的に議論に参加して考察を深めることで自らの研究方法を高め，研究姿勢を身につけることを目指すものとした（表３）。

表１．平成23年度人文研究基礎論「授業の概要」

■授業題目	人文研究の基礎	
■授業のキーワード	研究への関心，人文学的思想，口頭発表，議論	
■授業の目的	1. 学士課程における学修を回顧・省察する 2. 客観的視座から人文諸科学の研究を展望する 3. プレゼンテーションの技法を学ぶ	
■授業の到達目標	1.［知識・理解・関心］人文諸科学の多様な研究に関心をもって理解することができる 2.［思考・意欲・態度］人文学の発想に基づいて研究に取り組むことができる 3.［判断・技能・表現］専門分野を異とする人々に研究内容をわかりやすく伝えることができる	
■授業概要	人文諸科学の研究内容に関するワークショップ・口頭発表と討議を中心とした15回で構成される	
■授業スケジュール	第１回	オリエンテーション【授業概要説明】学習者間のアイスブレイク
第１部　要約力を身につける	第２回	【要約技法に関する講義】教材に基づきながら，要約の手順，コツについて説明を行う。論文要旨の読み方について説明を行う
	第３回	【大学院生の研究生活】指導教員との関係，２年間のスケジュール，論文要旨の読解
	第４回	【要旨のブラッシュアップ①】グループ内発表と相互フィードバック
	第５回	【要旨のブラッシュアップ②】グループ内発表と相互フィードバック，論文要旨の修正
第２部　研究計画を身につける	第６回	【研究構想に関する講義】研究計画立案の手順，コツについて説明を行う
	第７回	学会発表，学会活用術，論文投稿に関する話題提供
第３部　プレゼンテーション力を身につける	第８回	【プレゼンテーションに関する講義】プレゼンテーションの手順，コツについて説明を行う
	第９回	【ディスカッション・批評的思考力に関する講義】ディスカッションの手順，コツ，批評的思考力について説明を行う
	第10～13回	【プレゼンテーション（私の研究）】個人発表とディスカッション
まとめと振り返り	第14～15回	【まとめと振り返り／授業評価アンケート】
■授業時間外学習	①卒業論文 or 専門分野の代表的論文の要旨を各自がまとめて提出 ②他者の論文要旨の読解 ③各自の論文要旨の修正 ④プレゼンテーションの準備・練習	
■成績評価法	口頭発表およびワークショップへの取組による	

表２．平成23年度人文研究基礎論「向上した点：受講者アンケート（15名）」

この授業を受講して向上した点	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
1. 研究内容を要約する力が身に付いた	2	10	2	1	0
2. 研究を計画的に行う方法を学んだ	3	7	2	2	1
3. プレゼンテーションの方法を学ぶことができた	7	6	1	1	0
4. ディスカッションの方法を学ぶことがきでた	6	4	3	2	0
5. その他向上したと思われる点					
・グループワーク，様々な分野の院生との関わりを通してコミュニケーション力（が向上した） ・グループワークやプレゼンによる「発表する力」（が向上した） ・プレゼンにおける聴き手のアティチュード（が向上した） ・研究をする姿勢・研究をすることの意識の共有（が向上した） ・プレゼンの資料作成を通して自己の理解度の曖昧さに関する自覚（が向上した）					

平成23年度からスタートした両科目について実施したアンケート結果の一部を紹介しておきたい。表２と表４のいずれも，両科目が学生に高く評価されている結果を示している。

３．取組その２

新設した上記コア科目と併せて，学生は既存の専門分野の「特論」及び「課題研究」をコースワークとして体系的に履修しつつ，さらに指導教員の「演習」を介した研究指導を通じて自らの研究課題に取り組み，それを修士論文へと結実させていくことになるが，そのリサーチワークを強化する方策も考案した。すなわち，学生が修士論文作成に向けて主体的に研究に取り組むための３段階の研究発表会――構想発表会（１年次末に関連分野で実施），中間発表会（最終年次前学期末に教育研究領域ごとに実施），研究成果発表会（最終年次末に人文科学専攻全体で実施）――のレベルアップを図るツールの開発である。これらの発表会は，当該学生はもとより，関係教職員のたゆまぬ努力と協力によって充実したものとなり，さらに外部講師等によるプレゼンテーション事前指導も今では定着した感があるが，今回，その各発表会を視野に入れた教員・学生間の対

表３．平成23年度人文研究実践論「授業の概要」

人文研究実践論（２科目開講：月６限・金５限）		
【授業の理念】 人文学科の教員を中心に組織される研究プロジェクトの成果にふれることで，人文諸科学の研究のプロセスを体験しその研究成果を学ぶとともに主体的に議論に参加して考察を深める		
■授業目標	1. 人文諸科学の研究の実際に触れることができる 2. 学際的視野をもって課題を考察することができる 3. 研究における総合的判断力を涵養することができる	
■授業題目	月６：東アジア漢字文化圏という視座に立った日本語研究への新たなアプローチ	金５：文化伝統の継承とアイデンティティ形成
■授業のキーワード	東アジア，漢字，日本語，対照研究	記憶，文化，伝統，アイデンティティ
■授業の目的	標記題目は平成22年度人文系学部長裁量経費にかかるもので，その成果の一端に触れることで研究実践の道程を実地に確認でき，標記題目に関する大学院生に相応しい素養が身に付くことを目的とする。	人文学科の研究プロジェクトの研究成果を学ぶとともに，その研究プロセスを体験することで，受講生が自らの研究に主体的に取り組む。
■授業概要	標記題目について，本プロジェクト参加教員が連携して連続講義を行い，成果の一端に触れる機会を提供する。さらに後半本科目を受講したことでえられた知識や発想をもちより逐次発表して批判を仰ぎながら，研究実践の道程がいかなるものかを体感する。	人文系担当学部長裁量経費「文化伝統の継承とアイデンティティ形成」の研究成果である「記憶の場」の具体的事例について個別知識を学ぶとともに，研究プロセスを体験する。
第１回	アイスブレーキング	導入：研究プロジェクトの概要説明
第２回	オリエンテーション	ピエール・ノラ『記憶の場』と現代における「記憶」ブーム
第３回	日本語から見た東アジア漢字文化圏その１	「キオクの場」としての「ノスタルジー」１
第４回	日本語から見た東アジア漢字文化圏その２	「キオクの場」としての「ノスタルジー」２
第５回	韓国語から見た東アジア漢字文化圏その１	アテナイ市民の自己存在としてのアクロポリス１
第６回	韓国語から見た東アジア漢字文化圏その２	アテナイ市民の自己存在としてのアクロポリス２
第７回	漢語から見た東アジア漢字文化圏その１	言語表現に見るハワイ日系米国人のアイデンティティ１
第８回	漢語から見た東アジア漢字文化圏その２	言語表現に見るハワイ日系米国人のアイデンティティ２
第９回	非漢字圏の言語から見た東アジア漢字文化圏その１	愛媛の戦後俳句と文化運動１
第10回	非漢字圏の言語から見た東アジア漢字文化圏その２	愛媛の戦後俳句と文化運動２
第11回	学生と教員による漢字文化をめぐるミニシンポジウムその１	イギリスの戦死者墓地と現地社会１
第12回	学生と教員による漢字文化をめぐるミニシンポジウムその２	イギリスの戦死者墓地と現地社会２
第13回	まとめとふりかえりその１	「記憶の場」研究会
第14回	まとめとふりかえりその２	「記憶の場」の方法論の意義
第15回	総括としての成果発表会	質疑応答

表４．平成23年度人文研究実践論「有用性，向上した点：受講者アンケート（15名）」（月６と金５の合算）

人文研究実践論は，全体としてあなたにとって有用な内容でしたか	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
	8	4	1	1	1
この授業を受講して向上した点，良かったところ					
・身近な事柄が，少し見方を変えることで「知」とつながる。そこへのヒントを見つける力。 ・研究のプロセスが参考になったと同時に研究の目的（目標）を明確にすることの大切さがわかりました。また研究をする上で必要な多様な考え方を取り入れる力が向上したと思う。 ・他分野の研究の方法・視点の違いを知ることができた。 ・多くの分野からのひとつのテーマに対するアプローチ方法を見ることができて面白かった。					

話を促進する紙媒体のツールとして，指導学生一人一人に対して指導教員が「研究指導計画書」を新たに作成することとした。

指導教員と相談の上で学生が作成する既存の「大学院生ポートフォリオ」中の「研究計画表」（表５）と上述した指導教員作成の「研究指導計画書」（表６）とを一対のものとして整備し，それぞれの発表会を見据えて学生・教員双方が研究計画およびその達成度を記録して活用することにしたのである。このような対話を通じて研究／指導プロセスを見極めていく双方向的な共同作業こそ，まさに私たちが目指す「形成的アセスメント」の要である。

表７a. b. は平成23年度研究成果発表会（平成24年３月６日実施）に関するアンケート結果の一部である。もちろん，アンケート項目によっては，発表者と指導教員とでは回答結果に相違が生じるのもある意味当然と言えるであろうが，このような発表会を実施する意義については，誰も否定していないことが重要な点であろう。

表５．研究計画表

３　研究計画表（初年次用）

入学年度　　年度
教育研究領域　　文化研究　　主指導教員
学生番号　　副指導教員
氏　　名

初年次
研究題目
研究計画
達成度確認（修士論文構想発表会）

＊「研究題目」欄には、研究科長に届け出ている研究題目を記入すること。
＊「研究計画」欄には、当該時期にどのような研究を行う予定であるかを記入すること。
＊「達成度確認」欄には、それぞれの発表会における研究の達成度を記入すること。
＊本表は、入学後指導教員と協議の上作成し、各自が保管すること。ただし、４月末日までに本表の「写し」２部を主指導教員に提出すること。

４　研究計画表（最終年次用）

入学年度　　年度
教育研究領域　　文化研究　　主指導教員
学生番号　　副指導教員
氏　　名

最終年次（前学期）
研究題目
研究計画
達成度確認（修士論文中間発表会）

最終年次（後学期）
研究題目
研究計画
達成度確認（修士論文成果発表会）

＊「研究題目」欄には、その時点での変更された研究題目を記入すること。
＊「研究計画」欄には、当該時期にどのような研究を行う予定であるかを記入すること。
＊「達成度確認」欄には、それぞれの発表会における研究の達成度を記入すること。
＊本表は、最終年度の初めに指導教員と協議の上作成し、各自が保管すること。ただし、４月末日までに本表の「写し」２部を主指導教員に提出すること。

表６．研究指導計画書

法文学研究科　人文科学専攻　研究指導計画書

入学年度　　年度
教育研究領域　　文化研究　　主指導教員
学生番号　　副指導教員
氏　　名

１年次
研究題目
研究指導計画
達成度確認（修士論文構想発表会）

研究指導計画書は主指導教員と副指導教員で共有してください。学生の修了後は人文科学専攻長に提出してください。デジタルファイルで指導計画書を作成した場合は、印刷したものを専攻長に提出してください。

最終年次（前学期）
研究題目
研究指導計画
達成度確認（修士論文中間発表会）

最終年次（後学期）
研究題目
研究指導計画
達成度確認（修士論文成果発表会）

表７a．平成23年度研究成果発表会：発表者の回答

発表者　7名		①強くそう思う	②そう思う	③あまりそう思わない	④全くそう思わない
a	自分の履修計画及び研究計画は適切であった。	1	5	1	0
b	自分が立てた研究目標を達成できた。	1	5	1	0
c	発表会で研究成果を的確かつ簡明に伝えることができた。	0	6	1	0
d	このような研究成果発表会の実施は意義がある。	5	2	0	0
e	発表会前のプレゼン講習会は役にたった。	1	5	0	0

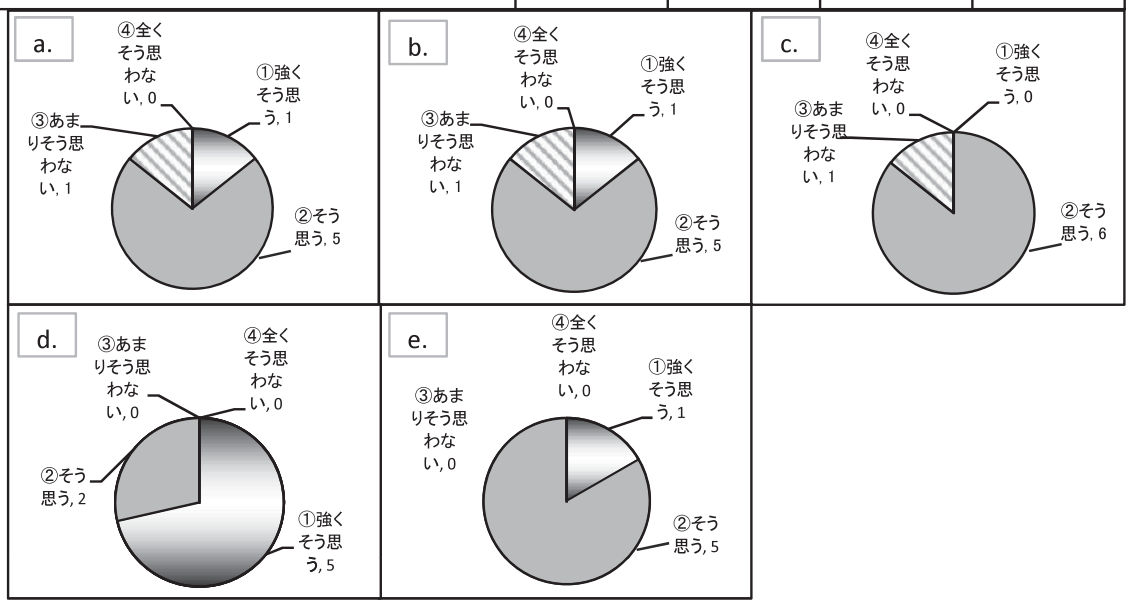
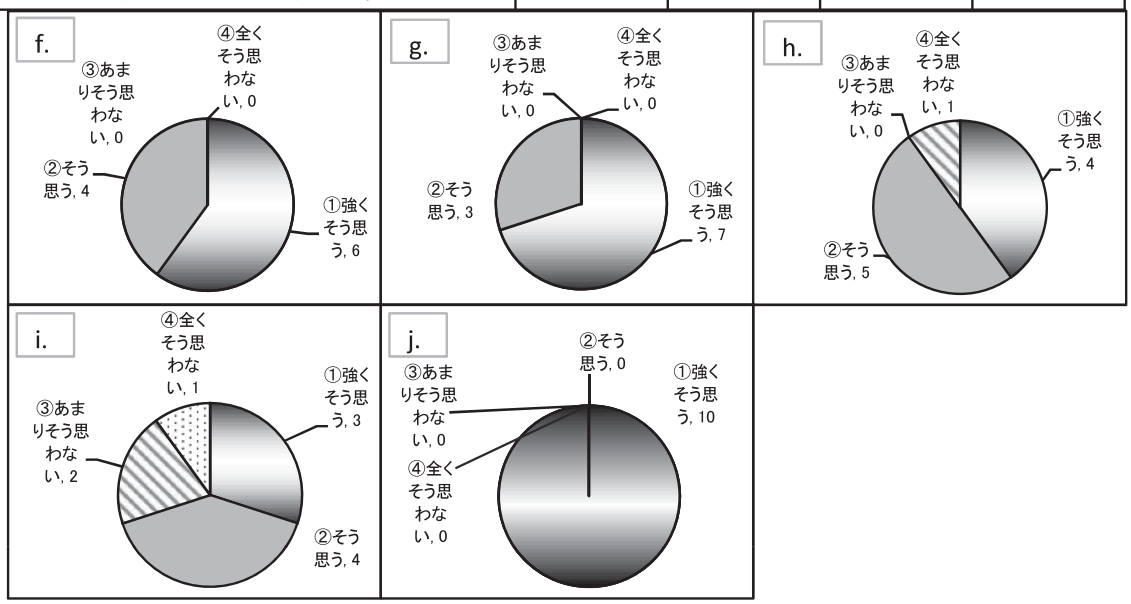


表７b．平成23年度研究成果発表会：指導教員の回答

指導教員（主・副指導教員）　10名		①強くそう思う	②そう思う	③あまりそう思わない	④全くそう思わない
f	指導学生の履修計画及び研究計画は適切であった。	6	4	0	0
g	指導学生は研究目標を達成できた。	7	3	0	0
h	指導学生は発表会で研究成果を的確かつ簡明に伝えることができた。	4	5	0	1
i	指導学生は「大学院生ポートフォリオ」を活用して有効な履修及び研究活動を実現できた。	3	4	2	1
j	このような研究成果発表会の実施は意義がある。	10	0	0	0



４．取組その３

人文科学専攻の学生は，２年間（長期履修の場合は３年間）という短期間に教育研究の一定の成果を挙げることに専念するあまり，ともすれば就職戦線に乗り遅れる場合も少なくない。そこで，著名な外部講師を招いて大学院生に的を絞った「就職支援セミナー」（平成23年７月21日）を開催し，全国の大学院生や企業の動向にも注意を払うことや就職活動及びキャリア教育活動に対する意識改革を試みた。セミナーには文系・理系双方から100人を超える参加者があり，「学部生の場合との違いを具体的に知ることができた」とか「大学院生向けの就職活動について現状を詳しく知る機会が少なかったのでとても参考になった」などの意見が多数寄せられた。このような取組が全学的な行事に発展することを望んでいたところ，平成24年度にそれが実現したのは喜ばしい限りである。

ここでは文系学生から寄せられたセミナーを評価する声の一部を以下に挙げておく。

- 企業と自分とのつながりを見出すことの大切さを知った。
- 自分の思いを上手く伝えることが重要であることが分かった。
- 自分が取り組んできた研究をアピールするだけでなく，研究の過程で身についたものをアピールすることが大切であることが理解できた。
- どういうふうに自己分析するのかが分かった。
- 大学院生がつまずきやすい点や，大学院生ならではの長所，考え方などが参考になった。

５．取組その４

最後になるが，入試方法の改善にも取り組み，コア科目「人文研究基礎論」の理念として掲げている「多様な学修履歴を有する入学者」に対応するために，新たに「オープン型選抜」を導入した。この入試では，他大学や他学部出身者，さらに社会人や留学生などで，学んできた内容が必ずしも人文科学専攻における学修内容とは直結しない者にも大学院教育の門戸を広く開放するために，志願者が提出した研究計画書等を踏まえた「小論文」と「面接」の試験を通じて，志望する研究分野における成業の可能性を判定することが特徴である。従来からの「一般選抜，外国人留学生特別選抜，社会人特別選抜」に加えた「オープン型選抜」の各入試により，「人文科学専攻アドミッション・ポリシー」をクリアして入学した学生たちは，上述のような教育研究プロセスを歩むことになる。実際，平成24年２月入試から導入した「オープン型選抜」で２名が入学し教育研究に励んでいる。

６．おわりに

以上が，人文科学専攻において平成22年度と23年度に取り組んできた入試形態の改善も含めたカリキュラム改革の全容である。この度の改革にあたっては，人文科学専攻のアドミッション・ポリシーをクリアして入学した多様な学修履歴を有する学生たちが，コースワークとリサーチワークの体系的な教育・研究環境のもとで学び，修了時に提出する修士論文を中心とする最終審査においてディプロマ・ポリシーに沿う力を身につけていることを大前提とした。そのための入学者選抜方法の多様化であり，コア科目の開設であり，そして何よりも修士論文作成に向けて，３段階の発表会と関連ツールの整備も含め，学生が指導教員との密接な対話を通じて各自の研究の達成度を段階的に見極めていく形成的アセスメントの導入である。

本改革案は平成22年度に策定し，専攻会議の了承を得た上で，平成23年度から本格的に実施しており，現在まだ２年目で，今年度末の修了生から改革の成果が問われることになろう。その意味でも，しばらく追跡調査を経た上でないと，修士論文等の質の向上などに関しても確たることは言えない。ただ，本論中に掲載している平成24年３月６日に実施した研究成果発表会時の指導教員のアンケート結果からも分かるとおり，「指導学生の研究目標の達成度／研究成果の的確かつ簡明な発表」という項目に対していずれも高い評価が示されている。また，ここには間に合わなかったが，平成24年９月26日に開催した今年度の中間発表会後のアンケートにおいては，学生同士の活発な質疑応答を評価する声が多く寄せられており，専門を異にする学生間のコミュニケーションを通じて自らの研究方法に活かすという「コア科目」が目指す方向の一端が実践されているものと受け止めたい。いずれにしても大学院教育の実質化に向けたカリキュラム構築と形成的アセスメントへの取組については，今後とも継続して推進していくつもりである。なお上述した新たな修士課程教育の概要については，概念図「人文科学専攻における教育体系」（図１）として最後に掲載したので，参照いただければ幸いである。

愛媛大学 GP 採択２年間で受けた事業経費により，人文科学専攻として，以下のような行事を行い冊子を作成している。ここでの事例報告の基礎資料とした。とりわけ「形成的アセスメント」については，平成22年12月４日にご講演いただいた東北大学大学院教育学研究科教授有本昌弘氏から学ぶところが大きかった。記して感謝申し上げたい。

1. 『愛媛大学大学院教育改革講演会　大学院教育の実質化と形成的アセスメント』（2011年３月発行）
2. 『2013年春修了者対象　大学院生のための就職支援セミナー』（2012年３月発行）
3. 『平成22・23年度愛媛大学教育改革促進事業（愛媛大学 GP）

報告書　教育の実質化を図るためのカリキュラム構築と形成的アセスメントの導入』（2012年３月発行）

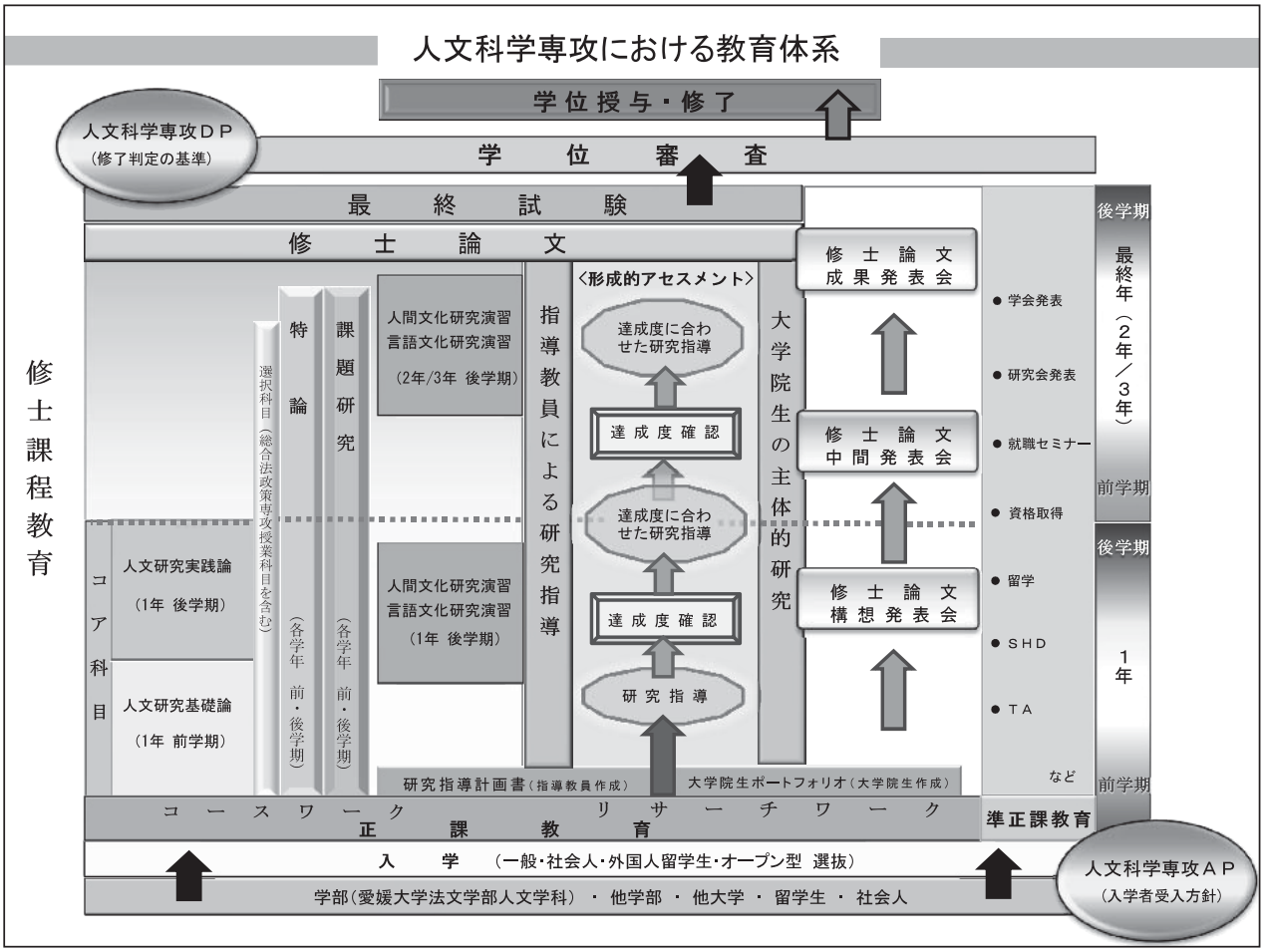


図１．人文科学専攻における教育体系